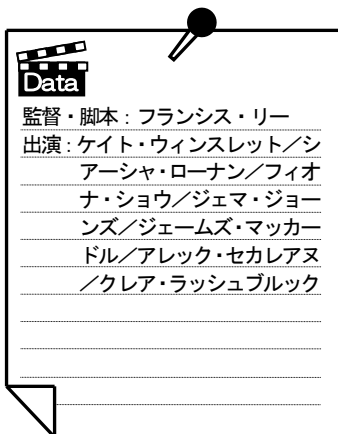




👁️👁️ みどころ

タイトルからは何の映画かさっぱりわからないうえ、偉大な女性古生物学者、メアリー・アニングの名前も聞いたことがない。したがって、大きなスカート姿のケイト・ウィンスレットが海辺でアンモナイトを採集している姿にも違和感が・・・。

キム・ギドク監督の『サマリア』(04 年) や『中国の植物学者の娘たち』(05 年) で観た、10 代の女の子同士の同性愛の物語には妖しさと美しさ、そしてときめきがあったが、「21 世紀ゲイ映画の旗手」と呼ばれていたフランシス・リー監督による本作の同性愛はどんなストーリーに? どんな演出に?

史実は史実として! 他方、映画は映画として! ケイト・ウィンスレットとシーシャ・ローナンという“二大女優”が織りなす複雑なストーリーと愛の姿(?) をしっかり楽しみたい。

———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— * ———— *

■□■本作のヒロインは? 監督は? 本作でまた新たな発見を! ■□■

本作の原題は『Ammonite』。邦題は『アンモナイトの目覚め』と、少し説明が加えられているが、所詮そんなタイトルだけでは何の映画かさっぱりわからない。そもそも、聞いたことはあるものの、「アンモナイト」って一体ナニ? Wikipedia によると、アンモナイトとは、「古生代シルル紀末期(もしくは、デボン紀中期)から中世代白亜紀末までのおよそ 3 億 5000 万年前後の間を、海洋に広く分布し繁栄した、頭足類の分類群の一つ。全ての種が平らな巻貝の形をした殻を持っているのが特徴である」とされている。

本作でケイト・ウィンスレットが演じるメアリー・アニングは 19 世紀のイギリス初期の化石学者で、古生物学者(1799 年～1847 年)。『チューリップ・フィーバー 肖像画に秘めた愛』(17 年)では、17 世紀のオランダで「チューリップ・バブル」が発生し

たことをはじめて知った（『シネマ 43』240 頁）が、イギリスでは19世紀初めに「化石採集」がブームになったらしい。そんな時代状況の中、メアリーは観光客相手に化石の採集を始めたが、すぐに化石への興味が強く高い値段で買ってくれる科学界と関係を築いていったらしい。へえー、知らなかったなあ・・・。

他方、本作の監督は本作が長編第2作となるイギリス出身の52歳のフランシス・リー。パンフレットやいろいろな資料を読んでわかったのは、その第1作『ゴッズ・オウン・カントリー』（17年）はゲイの物語だということ。へえー、知らなかったなあ。そんなヒロインとそんな監督を本作で新発見！しかして、その物語は？

■□■ 二大女優の豪華共演！2人はなぜ共に生活することに？ ■□■

私は本作のヒロインの名前も監督の名前も全く知らなかったが、本作はケイト・ウィンスレットとシアーシャ・ローナンという二大女優の豪華共演だからビックリ！ケイト・ウィンスレットはアカデミー賞ノミネート7回、1994年生まれ、シアーシャ・ローナンは26歳の若さでアカデミー賞3回ノミネートだから、すごい。

本作の時代は1840年代。舞台はイギリス南西部にある海辺の町、ライム・レジスだ。かつて彼女の発掘した化石が大発見として世間をにぎわせ、大英博物館に展示された栄光も今は遠い昔となり、メアリーは今、土産物用のアンモナイトを発掘しながら母親・モリー（ジェマ・ジョーンズ）と2人でひっそり暮らしていた。そんなメアリーの店にある日、ロンドンから地質学者のロ德里ック・マーチソン（ジェームズ・マッカードル）が妻のシャーロットを伴って訪れるところから本作のストーリーが始まる。化石の研究に熱意を持つ裕福なロ德里ックは、メアリーが磨き上げたアンモナイトを購入すると共に、採集に同行させてほしい、という意外な依頼を。人づきあいが苦手な社交界に全く興味のないメアリーは露骨に嫌がったが、「高い報酬を弾む」と言われると・・・？

さらに、ロンドンに帰らなければならなくなったロ德里ックからメアリーが頼まれたのは、シャーロットをこの静かな地で療養させるので、数週間預かってほしい、というもの。それを引き受けたのも、高額な報酬のため？きっとそうだと思うのだが、なぜ、シャーロットはあんなに抜け殻のようになっているの？そんな2人の新たな生活は？

■□■ 当時の女性の地位は？メアリーはそれをどう認識？ ■□■

『タイタニック』（97年）でローズ役を演じたケイト・ウィンスレットは、史上最年少で2度目のアカデミー賞主演女優賞にノミネートされたが、同作でも、当時のイギリスの階級社会における女性差別は歴然としていた。レオナルド・ディカプリオが演じた若者・ジャックはそんな階級社会に反発し、自由な国・アメリカを目指してタイタニック号に乗り込んだわけだが、そんなジャックにとって、上流階級の男の婚約者、ローズは所詮「高嶺の花」。しかし、ローズが面白半分（？）ジャックにヌードのデッサンを描かせたことをきっかけとして、あんな劇的な展開に！

それはともかく、タイタニック号が処女航海に出航した1912年よりずっと前の18

40年代のイギリスでは、女性差別はもっとはっきりしていた。そんな時代状況の中でメアリーは女性の古生物学者として如何なる活動を？森喜朗元東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長の“女性蔑視発言”を巡っては、国会議員をはじめとして、各界を代表する能弁な女性陣からの攻撃がすごかったが、あの当時の女性差別について、メアリーは本作で一言もしゃべらない。したがって、それについては観客1人1人がしっかり観察する必要がある。

『タイタニック』でケイト・ウィンスレットは、婚約者に対しても強気を貫く中でジャックとの恋にのめりこんでいったローズ役を演じたが、それから20年後の本作では、女性差別の現実に不満を唱えることもなく、黙々と自分の仕事を果たす古生物学者、メアリー役を存在感タップリに演じている。あの時の女性はコルセットをつけているのが常識だったが、母親との2人暮らしならそんなものは不要。したがってメアリーのスカートはいつもぶかぶかだ。そのうえ、シャーロットを連れて海岸にアンモナイト採取に出かけたメアリーは、平気でスカートをまくって放尿していたからその姿にビックリ。

メアリーの古生物学者としての功績には華々しいものがあったようだが、本作に見るイギリス南西部の海辺の町、ライム・レジスでのメアリーの生活を見ていると、華やかさとは縁遠く、うら寂しさでいっぱいだから、それに注目！

■妻は刺身のツマ？メアリーとシャーロットは水と油！■

他方、『つぐない』（07年）で、大女優、キーラ・ナイトレイを向こうに回して大きな存在感を見せつけて、アカデミー賞最優秀助演女優賞にノミネートされたのがシアーシャ・ローナン（『シネマ19』306頁）。同作では、感受性が強く、想像力の強いプライオニーが犯した“ある1つの罪”が、ストーリーの牽引役を果たしていた。しかし、本作におけるロ德里ックの妻・シャーロットは存在感のない弱々しいだけの女性だ。

ロ德里ックはアンモナイトの収集と女性ながらも有名な古生物学者、メアリーに会うため、喜んでライム・レジスの町にやってきたが、シャーロットは妻だからそれに付き添っただけ。シャーロットがそんなどうでもいい存在であることは、食事のために入ったレストランで、ロ德里ックが自分だけでなくシャーロットの料理もすべて決めているシークエンスを見ても、はっきり読み取ることができる。日本には“刺身のツマ”という言葉があるが、本作におけるシャーロットはまさにそれ。そのうえ、シャーロットは流産のショックから立ち直れていないから、精神的にも肉体的にもどうしようもない存在だ。

そんなシャーロットを数週間預からなければならなくなったメアリーがシャーロットに対して邪険にふるまったのは当然。ロ德里ックが去った翌日、シャーロットは早速浜辺までついてきたが、不機嫌そうに黙ったまま何もしないから始末が悪い。それはそれで仕方ないが、そうかと思えば突然「採集を見せろ」と要求してきたから、それに対してメアリーが「口出ししないで」と冷たく言い放ったのは当然。あの当時の女性差別の中で古生物学者として頑張り、1人で生きてきたメアリーと、裕福なロ德里ックの妻としてノホホン

と生きてきただけのシャーロットが水と油の関係だったのは明らかだが・・・。

■□■献身的な看病はなぜ？心の交流は？その延長はどこに？■□■

愛媛県松山市で生まれ育った私は、電車で20分も乗ればすぐに梅津寺（ばいしんじ）海水浴場に行けたから、高校生までは夏になればいつも海水浴を楽しんでいた。そんな私だから、メアリーからの冷たい言葉に憤激したシャーロットが、いきなりメアリーから離れて1人海水浴に挑む姿を見てビックリ！こんな寒い日に、こんな荒波の中に入れば、すぐに風邪をひいてしまうのでは？そんな心配どおり、次の日、メアリーの店に訪れたシャーロットは高熱を出して倒れてしまったから、アレレ……。往診した医師から24時間の介護が必要だと聞かされたメアリーの口から「冗談じゃない！」との言葉が出たのは当然だ。

なぜメアリーが、こんなワガママ女、シャーロットのために看護しなければならないの！私を含めて誰もがそう思うはずだが、その後、スクリーン上にはメアリーが眠り続けるシャーロットに対して献身的な看護をする風景が描かれるので、それに注目！なぜ、メアリーは献身的な看護を？なぜそんな演出にしたのかはフランシス・リー監督に聞かなければわからないが、メアリーの献身的な介抱のおかげでシャーロットが完全に回復した時、二人の間に温かな感情が芽生え始めていたのは間違いない。この2人の心の交流は一体ナンニ？そして、この2人の心の交流はその後どこに向かうの？

■□■音楽会に見る微妙な感情は？二大女優の同性愛は？■□■

コロナの第4波が襲来！もはや、医療崩壊の段階に！“まん延防止等重点措置”が拡大され、“緊急事態宣言”の発出が要請されている2021年4月中旬、医師たちはそれぞれの持ち場で大変な戦いを繰り広げている。しかし、本作に見る医師の往診風景はのどかなものだ。また、今の時代なら、男性医師が自宅で開く音楽会に“ある個人的な感情”を抱く女性患者を招待するなどという行為は厳禁。著名医師のそんな行為がバレたら、マスコミの餌食にされることは確実だ。しかし、1840年代はのどかなものだから、医師のお誘いに乗ったメアリーとシャーロットは、久しぶりにおしゃれをして音楽会に出かけていくことに。これはすでにシャーロットの看病を通じて2人の間に心の交流が生まれていたためだが、会場でかつてメアリーと親密だったエリザベス・フィルポット（フィオナ・ショウ）を紹介されると、シャーロットはすぐに上流階級の人たちの輪に溶け込んでいったから、アレレ。そこでメアリーの心の中に生まれた感情は？こりや嫉妬？あるいは孤独感？さらにはその両方？

私はそういう感情の分析に鈍感だが、デビュー作たる『ゴッズ・オウン・カンントリー』で男同士の同性愛を描き、「21世紀ゲイ映画の旗手」と呼ばれたフランシス・リー監督はその分野が得意らしい。メアリーはシャーロットを会場に残したまま1人で帰ってしまったが、夜遅く帰ってきたシャーロットはそんなメアリーの深い思いをしっかりと汲みとったようだ。そのため、いつものように2人で1つのベッドに入ったシャーロットが、メアリ

一に対して「今夜のあなたは輝いていた」と励ますようにメアリーの手を握ると・・・？

キム・ギドク監督の『サマリア』(04年)『シネマ7』396頁)や『中国の植物学者の娘たち』(05年)『シネマ17』442頁)で観た10代の女の子同士の同性愛も良かったが、年増女のメアリー(?)と若いけれどもすでに流産を経験しているシャーロットとの濃密な同性愛の姿は如何に?それは、あなた自身の目でしっかりと!

■□■逢うは別れのはじめとは!しかし、ロンドンでは?■□■

“逢うが別れのはじめとは、知らぬ私じゃないけれど”。これは『別れの磯千鳥』で歌われる有名な歌詞だが、本作を見ていると、それがよくわかる。そんな2人の同性愛が定着すると、海岸での採集の仕事も順調に。また、シャーロットの健康も順調に。すべてが良いこと尽くめだ。ところが、そんな“輝く日々”は光のように過ぎ去り、ロデリックからシャーロットの帰還を促す手紙が届くと、シャーロットはロンドンに戻っていくことに。しかして、本作ラストは、ロデリックと共にロンドンに落ち着いていたシャーロットからの招待でメアリーがロンドンに赴くシークエンスになる。しかして、そこに待っている展開に注目!

メアリーがロンドンに向かった目的の1つがシャーロットとの再会であったことは間違いないが、シャーロットとの同性愛の復活は?「安息日」と決められている日曜日でも仕事をしていたため批判されていたメアリーにとって、自分の魚竜イクチオサウルスの化石がロンドンの大英博物館に飾られているのは誇らしい限り。ロンドンに行けば、必ずそれを見届けなければ!そんな強い思いを持っていたのは当然だ。すると、メアリーにとっては、そのどちらが主目的?他方、メアリーは貧乏人だが、今ロンドンに住んでいるシャーロットは、裕福な夫の庇護の下で贅沢三昧の暮らしをしていた。侍女の目もはばかりず、平気でメアリーと抱擁しキスをしようとするシャーロットは、夫がいない間はこの邸宅の主らしい。そのため、そこでのシャーロットの提案は、メアリーとの同居という驚くべきものだった。しかも、シャーロットが決めたメアリーの部屋は独立した立派な部屋だが、あるドアを開けるとシャーロットの部屋につながっていたからビックリ!これなら、2人はいつでも会いたいときに会え、愛を交わしたいときにそれができるというわけだ。

また、仕事に関しても、これまでの実績があればロンドンで生活してもメアリーの収入の安定は間違いなし。経済的な安定だけを考えれば、まさにそのとおりだ。さらに、シャーロットが今メアリーに対して示している好意は単なる好意(経済的支援)だけではなく、女同士の同性愛を含むものであることも明らかだ。そのため、本作ラストに見るシャーロットは、本作導入部で見たシャーロットとは全然違う元気さだが、それを聞いたメアリーは?

■□■2人の実像は?なぜこんな脚本に?■□■

私は全然知らなかったが、Wikipediaによれば、英国科学史ジャーナルは、メアリーを「世界の歴史上で最も偉大な古生物学者」と称しているそうだ。もっとも、その生涯は4

7歳と短く、また、生涯独身を貫いたらしい。他方、シャーロットの方は地質学者である夫のロ德里ックと世界各地を旅する中でさまざまな化石のスケッチを残し、夫の仕事を大いに助けたらしい。また、80歳まで夫と共に旅行を続けたそうだからすごい。もっとも、本作の原作となった『メアリー・アニングの冒険 恐竜学をひらいた女化石屋』（吉川惣司・矢島道子著／朝日新聞出版刊）によれば、メアリーがシャーロットに出会うのは20代の時らしい。また、Wikipediaによっても、夫と一緒に旅行するシャーロットがメアリーと出会い、親しい友人となったのは1820年代だ。さらに、1799年生まれメアリーと1788年生まれのシャーロットは約10歳違いだ、本作と違い、メアリーの方が年下だ。しかるに、フランシス・リー監督はなぜそんな史実に反して本作のような脚本を書いたの？

それを考えるについては、ロンドンの邸宅でシャーロットの提案を聞いたメアリーがはっきりそれを拒否する姿を確認したい。もっとも、シャーロットはなぜ自分の提案が拒否されたのかわからなかったようだから、このままメアリーがシャーロットから離れれば、以降永久に会うことなし。私にはそう思えたが、その後メアリーが向かった先は？そして同じくシャーロットが向かった先は？

本作ラストは何とも味わい深いシークエンスだが、フランシス・リー監督の演出ではメアリーもシャーロットも自分の気持ちは何も語ってくれないから、ラストの味わい方はあなた自身の自由な解釈の中でじっくりと！

2021（令和3）年4月19日記